書評

A. Sydorenko. *The Kievan Academy in the Seventeenth Century* (Ottawa, 1977) 194 p.
O. Subtelny. *The Mazepists. Ukrainian Separatism in the Early Eighteenth Century* (New York, 1981) 280 p.

土肥恒之

一

「共和国」(ジェチ＝ポスポリタ)東南部のウクライナ人が、一七世紀中葉、ボフダン・フメリニーツキの率いるコサックを中心にひき起した反乱によってポーランドの支配を離脱した、いわゆるウクライナ革命は、「東欧史における最大の転換期のひとつ」(R・ヴィットラム)、とされる。だが、固有の民族的並びに文化的統一体であるウクライナの、そのごのツァーリへの臣従(ロシアとの「併合」)は、ウクライナの人々にとって新しい軛の開始でしかなかった。約半世紀後のピョートルの時代に発生したマゼッパの反乱(ソ連の文献では「マゼッパの裏切り」(Измена Мазепы)を契機にして、ウクライナの自治は、完全に失なわれるに至るのである。これとは対照的に、ピョートルのイデオロギー政策の立案者であり、教会を世俗国家の機能上の一分枝とする基本的な指標を提供したのも、ウクライナの人、フェオファン・プロコポーヴィチであった。この組合せは、その限りでは、さほど奇異な現象とはいえないだろう。だが、マゼッパがかつて、ウクライナのキーエフ・アカデミーで学び、首領(ゲットマン)として物質的援助を惜しまなかったこと、そしてプロコポーヴィチが、このアカデミーが翌出した最も優れた教師の一人であった、という事実に出会う時、狭義のウクライナ史研究者ならずとも、当時のウクライナ社会について、より深い関心に捉えられるのである。以下に紹介するのは、最近ソ連以外で出版された如上の関心に応える著作であるが(※)、小稿は、独自の視点から本書のプラスとマイナスを府分けし、研究史上の位置付けを試みる、という意味での本来の「書評」ではなく、一個の素人による文字通りの新刊紹介にすぎないことを、最初にお断りしておきたい。

(※) おそらく、二〇世紀のウクライナ「分離主義」と関連して、ソ連以外でのウクライナ(史)研究は活発であり、また極めて示唆に富む。アメリカでの研究の現況については、中井和夫氏の報告(『ロシア史研究』三六号、一九八二年)がある。

二

A. Cydrenko. *Kievan Academy in the Seventeenth Cen-*

tary は、東欧における最古の高等教育機関の一つであり、東方教会の全般的衰退の時期においてその擁護と促進のうえで目覚しい成果をあげた、更にまたロシアにとっては「西欧の知的潮流への重要な架橋」となったキーエフ・アカデミーのその最初の、しかも「最も重要な世紀」の歴史を扱った最新の研究である。表題は一七世紀であるが、内容的にはピョートル改革期までをカヴァーしており、アカデミーの起源と発展、内部組織、カリキュラム、等々の諸側面が六章にわたって分析・叙述されている。以下では、幾つかの項目を立てて、要約的に紹介する。

〔アカデミーの起源〕　一六世紀後半のウクライナは、社会経済的にはシュラフタの南下、文化的には上層部へのカトリックの浸透、という形でポーランド化が進むなかで、民族の存亡の危機に立たされたが、この時期に、リヴォフをはじめとする若干の都市では、小領主や都市民といった世俗の信徒による正教会信仰（及び啓蒙）の向上のための団体（братство, lay confraternity）が設立された。地方教会の維持、貧民や未亡人の世話、そしてとりわけ教育が、その設立の狙いであった。例えば、リヴォフの団体では、ギリシャを手本にして、文法、修辞学、詩、アリストテレス哲学の初歩、天文学や自然学の僅かの知識、などが授けられたが、そのカリキュラムは全体として宗教的であり、正教会の教えを育むことが意図されたのである。当時のポーランドでは、イエズス会の宣教活動が積極的に進められ、ポーランドを熱烈なカトリックの国に変えつつあった。ラテン語第一のイエズス会の学校は、未曾有の人気と権威を得つつあり、両親がカトリックに改宗したウクライナの上層の子弟の多くを引き寄せた。その勢いは、正教会の擁護を掲げる世俗の団体の敵ではなかったのである。

かつての「町々の母なる町」、キーエフにリヴォフを範とした世俗団体が設立されたのは、一七世紀に入ってからであったが、ここでも、伝統的な「ギリシャ・スラヴ的方向」が採られた。即ち、学生に正教会の教義を伝え、有徳かつ有益な生活のために必要な基礎知識を授けることが目的とされた。行政の言葉としてのポーランド語にも注意が向けられたが、ラテン語は排除されたのである。したがって、より意欲のある学生は、イエズス会の教育機関に向うことになった（しばしば、背教に結果した）。キーエフの学校のこうした在り方に根本的な修正をもたらしたのが、リヴォフの学校出身で、一六二七年にペチョラスカヤ修道院の管長に就任したピョートル・モギラであった。彼は、その精神においては正教的な、だがイエズス会と比肩しうる進んだ教育を授けるべく、改革にのり出したのである。その最も具体的な現われが、ラテン語の最重視であった。更に、外部から講師を招いたり、若い修道士を外国の教育機関へ送りこんだ。モギラの改革は、教育を世俗の手から聖職者へ取り戻したが、その内容は、保守的な聖職者から反発をうけた。だが、いずれにせよ、一六三一年の秋には、学校は彼の方針に沿って運営されていた。そしてイエズス会の機関をモデルにした新しいカリキュラムとその拡大によって耳目を引いたキーエフの学校は、既に当時、誇張があるにせよ六〇〇人以上の学生を誇っ

たと言われた。

ウクライナの教育を再活性化しようというモギラの努力の誠実さに疑いはなかったにせよ、そこには彼個人の野心的意図があった。即ち、彼自身有力な候補であった府大主教の座を手に入れること（一六三三年に選出される）、そしてウクライナの聖俗エリート層の親モスクワ的態度をポーランドに向き変えること、がそれであった。モギラが亡くなったのは、一六四七年一二月であったが、この間に、キーエフはスラヴ世界の指導的な、精神的かつ知的な中心地となった。キーエフの学校は、モスクワの人々によって「キーエフの博識」（Киевская учeность）という高い評価をうけた秀れた卒業生を輩出したのである。

〔アカデミーの隆盛〕モギラの死後、キーエフの学校は、厳しい試練と苦難の季節をむかえた。一六四八年に始まるフメリニーツキの「流血の蜂起」は、ウクライナを悩ましていた烈しい社会的並びに政治的諸問題の解決に失敗し、争い、アナーキー、混乱をもたらすこととなった。そして一六五四年のペレヤスラウリの同盟は、ウクライナの諸々の自由に対するモスクワの侵犯に新しい入口を開いたのである。当初はフメリニーツキの重大な決定を認めず、ツァーリへの忠誠への宣誓を拒んだ教会側も、彼の直接的圧力の前に、膝を屈した。一六六七年、キーエフは最終的にロシアの支配圏に入り、これまで自律的なウクライナの正教会も、モスクワの総主教の管轄下に置かれたのである。コンモポリタニズムを特徴とし、西欧文明、カトリックとも親和的関係にあったキーエフの教会、そして学校は、伝統主義のモスクワにとっては、異端も同然であった。モスクワ総主教が、学校の廃止を選ぶ可能性さえ、現に存在したのである。一六九〇年の前後、化体説をはじめとする教義、キーエフで出版・利用されている教本、外国人の受入れ、等々に関して学校に対する厳しい規制措置がとられた。これまでキーエフで育まれてきた「学問の自由」が損なわれ始めたのである。

だが他方で、モスクワとのより密接な関係が、学校の慢性的な財政的不如意を緩和し、その地位を安定させたことも事実であった。キーエフの学校は、遅くとも一六八九年には、哲学と神学の両課程を持つに至り、アカデミーに昇格した。その公認は五年後であったが、同時に、ポーランド支配地域からも正教会の学生の入学が許され、ここにキーエフとモスクワの長い間の不和の源も解決された。イヴァン・マゼッパの統治の二〇年余（一六八七―一七〇九）、アカデミーは、文字通りその隆盛を迎えた。マゼッパは、アカデミーの財政的基盤を強化し、新たに一、〇〇〇人の学生を収容できる石造の建物を築き、多くの寄進を行った。芸術、文化、教育の面での強力な後援者（パトロン）マゼッパの時代のエリート的傾向と調和して、アカデミーは、コサック上層の子弟のみならず、才能ある多くの人々を引き寄せた。ステファン・ヤヴォルスキー、ドミトリイ・トゥプタロ、フェオファン・プロコポーヴィチ、テオフィラクト・ロパトゥンスキー、等々を輩出したこの時期こそ、キーエフ・アカデミーの「黄金時代」、ウクライナ史における「マゼッパ＝ルネサンス」の時代であった。

だがアカデミーが享受した平和で生産的な一時期は、一七〇八年、突然中断された。ロシアと「北方戦争」を闘っていたスウェーデンのカールXII世とマゼッパとの運命的な提携（いわゆる「マゼッパの裏切り」）が、それである。「マゼッパの町」は、その戦略的かつ象徴的な意義の故、A・Д・メーンシコフの率る軍隊による野蛮な破壊の焦点となった。一七〇九―一一年、キーエフの町には疫病が拡がり、その直後、町の周囲の畑をイナゴの大群が襲った。アンナ・キリストの支配に続く終末を予言するものが現われた。こうした荒廃と恐怖のなかで、教育は第二義的なものになったのである。

〔アカデミーの学生生活〕　アカデミーは、一七世紀を通じて二〇〇人をこえる学生数を誇っていた。とくにその「黄金時代」、カリキュラムの拡大と安定の回復のおかげで、一、〇〇〇人以上の学生をひきつけたのである。あらゆる社会層から学生がやってきた。地理的な遠さ、そしてキーエフの教育に対するモスクワの聖職者の敵視にも拘らず、モスクワからも、多くの学生がキーエフで学んだ。ロモダノフスキーやシェレメーチェフといった貴族も、息子をアカデミーに送ったし、ピョートル大帝に仕えた著名なスコットランド人、パトリック・ゴルドンもそうであった。セルビア、ブルガリア、モルダヴィア、ワラキア、そしてギリシャのような「外国」からも、学生がキーエフへやってきたのである。

ラテン語を最重視しつつも――全ての学生は、クラスだけでなく、私的にもラテン語での会話を義務づけられた――、アカデミーのカリキュラムの頂点は、哲学と神学であった。カキュラムは、多くの点で西欧の同時代のアカデミーや大学のそれに肩を並べるものであった。そこに医学や法学が欠けていたのは、アカデミーの目的が、あくまで正教会の擁護にあったこと、そして世俗の職業に対する聖職者の嫌悪も、これに与ったと思われる。学生は㈠講義、㈡討論、㈢演説、で諸々の学習を修め、試験はノーマルではなかった。

アカデミーの学生の多くは貧しく、したがって乞食は、普通の現象であった。彼らは、毎日、正午と夕方、小集団で町へ出掛け、頌詩、賛美歌、寸劇、等々を披露し、いくばくかのお金、食物を受けた。富裕な市民の家での子供の教育や、教区司祭の家での雑役によって「下宿」させてもらうものもいた。こうした彼らの生存のための闘いは、盗み、喧嘩、放浪などと共に、しばしば市民との衝突をひき起した。時には「彼らは、モスクワの兵士よりも悪い」、という悪評をかったのである。他方、学生は日々の糧を求めるなかで、ウクライナの農村に娯楽（そして啓蒙）をもたらした。キーエフ中世のスコモローフの伝統を継ぐ彼らの道化芝居、歌、下品な冗談は、いつも多くの人々を魅了したのである。

〔アカデミーの意義〕　キーエフ・アカデミーについては、これまで多様な立場から、多様な評価が与えられてきた。即ち、「ポーランド文明の鏡」、「ポーランドと擬似ビザンツ的要素との不幸な雑種」、「ウクライナにおけるピョートルの政策の既成の道具」、「ウクライナ・ルネサンスの鍵要素」、等々がそれで

ある。だがアカデミーの博学、行動性、影響力については、全ての意見が一致しているのである。

最後に、マゼッパ以後のアカデミーの役割についても付言しておこう。まったく皮肉にも、ロシアにおけるキーエフ株は、マゼッパ以後の半世紀に急上昇した。この間、教育あるキーエフの人々の北方、即ちロシアへの奔流の如き脱出がみられたが、彼らはモスクワや聖ペテルブルグでの聖職者のポストを支配したのである。ある資料によると、一七〇〇—六二年に、ロシアの高位聖職者のポスト一二七のうち、じつに七〇をウクライナ(及び白ロシア)生れのものが占め、ロシア人は四〇であったという。宗務院も、圧倒的にウクライナ人によって構成されていたし、同じことは、モスクワ・アカデミーや他の教育機関にも当て嵌るのである。だが、これとは対照的に、キーエフ・アカデミーは、多くの人材の流出によって、「地方的蒙昧」に陥った。一時は「大学」への昇格の試みさえあったこのアカデミーは、その後、過去の優秀さを取り戻すこともなく、一八一七年、聖職者の神学校へとその地位を低下させたのである。

なお本書には、キーエフ・アカデミーに深く関わった人物そして建物、などの三四葉もの貴重な図版・写真が収められている。

三

O. Subtelny, *Mazepists.* の紹介に移ることにしよう。全体を三部に分けた本書は、まず第一部では、マゼッパの反乱の簡単な経緯とその歴史的位置の設定が試みられる。第二部では、敗北したマゼッパ＝オルリクと同盟軍が逃れたトルコのベンデリの地での勢力立直しのための努力、とりわけクリミア・タタールやトルコとの「外交交渉」的側面の解明にあてられている。第三部は、ベンデリからのスウェーデンのカールXII世の帰国後、政治的エミグレとしてのオルリクの諸活動が跡づけられている。「マゼッパ主義者」という表題、そして以上のような内容からも明らかなように、本書の主要部分は、マゼッパの意志の忠実な後継者であったフィリップ・オルリクの、ウクライナを離れてからの諸活動、とくにスウェーデン、ポーランド、トルコ、クリミア・タタールとの外交的折衝にあてられている。即ち、本書は、ウクライナ問題を焦点にした、一八世紀初頭の東欧の国際政治史、外交交渉史の微細にわたる分析、と言うことができる。したがって、本来ならば、この点に絞って紹介されるべきものであろう。だが以下では、マゼッパの反乱とは何か、という筆者の素朴な疑問に対して興味深い回答を与えている第一部についての紹介を主にし、第二、三部については、「外交交渉」の基本的流れを追うにとどめたい。

〔第一部〕イヴァン・マゼッパとその反乱は、今日まで、一方でウクライナの分離主義、ナショナリズムの象徴として、他方のロシア中央集権主義の立場からは「身代り」とされてきた。こうした時代錯誤的な諸々のイデオロギー的枠組をはなれて、「本来、それはどうであったか」(L・フォン・ランケ)を考察すること、これが著者の問題に対する基本的姿勢である。そし

て、この点において甚だ興味深い、次のような見解を提出するのである。

西欧の初期近代を特徴づけるのは、絶対主義に傾斜する君主権力と地方的諸特権を擁護する貴族との間の政治的闘争であった。とりわけ一七世紀中葉の西欧では、反王権の波が、相次いで押し寄せたが、基本的には、これと同じ現象が、東欧でも若干の「タイム・ラグ」をもって発生した。即ち、西欧のフロンドが過去の物語となった頃（約半世紀後）、東欧では、その変種が相次いで発生したのである。ロシアの絶対主義に対してマゼッパが決起したように、スウェーデン、ポーランド、ハプスブルグ家、トルコの支配に対して、諸々の地方貴族が立ち上った。こうした反乱の根拠は、西欧と同じく東欧でも、彼らの土地（ラント）の「古い諸々の権利と自由」、「慣行」の保守・擁護にあったのである。だが貴族の反乱は、入念に計画された、政治的そして社会経済的秩序の転覆を意図しない「陰謀」であった点において、自然発生的で、社会変革的な農民蜂起とは性格を異にしていた。更に特徴的なことは、反乱の外国勢力への依存である。社会の一握りの構成員でしかなかった貴族層にとって、内部からの支持は期待できなかった。したがって、君主が戦争に巻き込まれ、反乱を押え込むために軍隊のすべてを差し向けることができない好機を狙って、貴族は決起したのであり、この点は、東欧には、とくに妥当する。君主にとっては、国内の敵と外国のそれとの積極的、あるいは潜在的提携は、非常な脅威となったのである。

もちろん、外国勢力への依存は、反乱にとってマイナスの要素を含んでいた。まず信頼関係の上で問題があったし、更に外国軍隊の出現は、ラントの住民の根深い「外国人嫌い」(xenophobie) の感情を起させ、彼らの支持の完全な喪失につながりかねなかった。また君主をして、反乱貴族は、外国の利害の「操り人形」である、と云わせる口実を容易に与えた。宗教も、重要でしかも厄介な問題であった。こうした不利な諸要素にも拘らず、貴族の反乱は、あえて外国勢力と手を結ばざるを得なかったのであり、これなしには、彼らのラントの諸々の権利と自由を守ることは、不可能であった。

東欧の反王権の運動においては、ブルジョアジーの役割がほとんど皆無に等しかったこと、民族上の忠誠と敵対がより明瞭であり、したがって民族的要因が重要な役割を果したこと、等等の点において、西欧のそれに較べて相違がみられた。だが、その基本的な性格は同一であった、といえる。一九―二〇世紀の東欧の歴史家は、こうした貴族の反乱を、近代の民族解放闘争のパターンに適合させようと試みたが、それは不可能である。愛国主義は、確かに反乱を少しは動機づけはしたが、貴族の伝統的な身分的な諸々の権利の防衛こそが、反乱の主要な関心であったのである。マゼッパの反乱は、まさにこうした性格の反乱であった。以下では、多少具体的に反乱の経緯を追うことにしよう。

一七〇〇年に始るロシアとスウェーデンとの北方戦争は、ウクライナの住民にとっても、人的及び物質的に多大な犠牲を強

いるものであった。否、その負担は、ロシアよりも、遥かに重かったのである。例えばウクライナの人口（約一一〇万）から四万人が戦場へ駆り出されたのに対して、ロシアからの比重は、その四分の一程度であった。更に戦場となったウクライナの町や村では、ロシア軍による掠奪、侮辱、破壊が相次ぎ、一七〇八年、スウェーデンの侵入を前にして、有名な焦土作戦が採られた。戦争に伴うロシア軍のこうした行動に対して、ウクライナの住民は、不満をぶつけた。だがピョートルは、「……これらの諸困難は、避けられない。それに耐えることが、国の一般的福祉にとって必要である」、と言って憚らなかったのである。

他方、この戦争において、ウクライナのコサックは、もはやヨーロッパの軍隊の敵ではなく、彼らの部隊の戦死は、高い割合にのぼった。ロシア人指揮官の下での要塞建設の労働も、コサックの誇りを傷つけた。こうした状況で、マゼッパにはピョートルが彼を首領の地位から下ろす意向である、という噂や、A・Д・メーンシコフがそれを狙っている、という報告が伝えられた。一七〇八年、マゼッパは、スウェーデン、ポーランドのウクライナ侵入を目前にして、ピョートルに、一万人の軍隊の派遣を願い出た。だがピョートルの回答は、「一万人どころか、一〇人たりとも分けられない。出来る限り、自分で守れ」、という拒否であった。これは、マゼッパにとって、ツァーリへの忠誠の基礎である協約（一六五四年）の破棄にも等しいものと映った。けだし、マゼッパのツァーリに対する従順、勤務、忠誠は、彼のラントの諸特権と伝統を尊重し、保護する、という中世的な「契約原理」に支えられていたからである。こうした一連の出来事を契機にして、マゼッパは、二一年に及ぶツァーリへの忠誠を棄て、秘かに、カールXII世への接近を図った。カールXII世は、彼の軍隊でもってウクライナを守り、ウクライナが完全かつ永久にモスクワから逃れ、旧来の諸々の権利や特権を回復するまで、ロシアと和平しないこと、を基本とする協約にサインし、マゼッパは、三万のコサック兵を連れてスウェーデン軍に加わることを約したのである。

この事件は、これ迄マゼッパに一片の疑いすら抱いたことがなかったピョートルにとって衝撃的であった。ただちに、ウクライナの住民に向けて、反マゼッパのプロパガンダが企てられた。そして特徴的なことには、「ロシアの重い軛」から逃れ、ウクライナの権利と自由を守るために、スウェーデンに加われ、というマゼッパ陣営の呼びかけにも拘らず、ほとんどのウクライナ住民は、現状にとどまること、即ちツァーリへの忠誠を選んだことである。既にウクライナ全土が、ロシア軍によって占拠されている、という状況だけが、これを説明するものではない。そこには、ウクライナの住民固有の原因が存したのである。第一に、マゼッパは、農民や一般のコサックに人気がなかった。彼の貴族的な習慣や親ポーランド的態度に加えて、マゼッパの統治した二一年間のウクライナは、スタルシナ＝貴族の支配確立の過程にあったことである。マゼッパは、こうした勃興するエリート層を体現していたのである。第二に、ウクライナの住民一般の「信仰における頑迷」さ、宗教に関する敏感さ、に起

因する問題があった。ルター派のスウェーデン、カトリックのポーランドとのマゼッパの同盟は、多くのウクライナ人にとって、甚だ不愉快な事件であったのである。皮肉にも、正教会に対するピョートルの関心がきわめて薄かったのに対して、マゼッパは、ウクライナの正教会がかつて持った、最も物惜しみせぬ後援者であった〔二を参照〕。

こうして、懸命なプロパガンダにも拘らず、マゼッパと共にスウェーデン陣営に加わったのは、八〇〇―一、〇〇〇人のスタルシナ貴族とその家族、そして四、〇〇〇人余りのコサックにすぎなかった。マゼッパの反乱は、約半世紀前のフメリニーツキのそれが、社会の根本的再建を目指す、コサックと農民による民衆運動であったのとは対照的に、発生期のウクライナのエリート層による、政治的及び経済的現状（status quo）を維持するための企て、と云うことができる。

〔第二部〕　ポルタワでの敗北後、カールXII世とマゼッパは、辛くもトルコに逃れた。ここに、その後五年に及ぶベンデリ時代が始まる。約八、〇〇〇人（ウクライナ・コサック四、〇〇〇―五、〇〇〇。ポーランド人二、〇〇〇。スウェーデン人五〇〇、等）のコロニーは、諸国の外交官、廷臣、密使、軍人の出入りする「国際外交と陰謀のミニ・センター」となったのである。だがマゼッパは、間もなく亡くなり（一七〇九年九月）、カールXII世の強い後押しで、フィリップ・オルリクが首領の座についた（一七一〇年四月）。「モスクワの軛がウクライナから取り除かれ、ラントに古い自由が帰るまで」ロシアと和平しない、という約束をカールXII世から取りつけた賢明で教育のあるオルリクは、マゼッパ後のウクライナ解放の重荷を担うことになったのである。

亡命先でのオルリクの努力は、まずクリミア・タタール、そしてトルコの協力の取りつけに向けられた。ウクライナとクリミア・タタールとの関係は、社会経済的及び文化的にも一貫して敵対的であったが、一七世紀のポーランドのシュラフタの浸透、続いてツァーリのそれは、共通の政治上の敵として両者を結びつけた。クリミアのハンは、ポルタワ直後から、カールXII世、マゼッパに近づき、トルコに対ロシア戦争を布告させ、それが不可能でも、ロシアとの戦争の継続を提案していた。タタールとの同盟が成立した一七一一年、約五万の軍隊は、ウクライナへ進攻し、大きな成果を収めるかにみえた。だが、この時、タタール軍による突然の略奪行為によって、同盟は一挙に破局をむかえた。タタールの行為は、ロシアの抑圧を取り除くためには、トルコやタタールとの同盟を恐れるべきでない、というオルリクの事前の宣伝を台無しにしたからである。

他方、トルコは、ロシアの南下によって黒海沿岸の支配権を脅かされつつあったから、戦略的に重要なウクライナにコサックの臣従国家をつくる、という従来からの計画を実施に移す機会を狙っていた。トルコのこうしたプラグマティクな態度とウクライナのエミグレの願望は、ウクライナからロシア人を追放する、という限りにおいて一致した。だがレアル・ポリティークだけでは片付かない問題があった。宗教である。即ち、トル

コとの同盟は、ウクライナの正教会からモスクワの宗教的権威を取り除くが、逆にコンスタンティノープル（あるいはエルサレム）のそれの下に入ることを意味した。また、ウクライナの将来にとって、トルコの影響力の強化は決して好ましいことではなかった。したがって、オルリクにとっては、もしコサックが主人を受け容れなければならないのなら、近くて強力な、しかも異教のスルタンではなく、遠いスウェーデンの方が好都合であった。加えて、信仰篤いオルリクのイムラムに対する個人的嫌悪も、トルコとの同盟を難しくしたのである。

〔第三部〕　一七一四年一〇月、カールXII世は、突如、ベンデリを離れ、スウェーデンに帰国した。あとに残されたウクライナのエミグレは、窮地に追い込まれた。やむなく、オルリクの小部隊もスウェーデンに向ったが、その滞在は、いかなる政治的成果ももたらさなかった。カールXII世は、オルリクを真の政治指導者として遇し、僅かながら物資的援助を与えたが、これさえも、一七一八年一一月、「北のライオン」の突然の死去によって絶たれたのである。スウェーデンをあとにしたオルリクは、その後、ハノーヴァー、ブレスラウ、クラカウを転々としながらも、反ロシアとウクライナ右岸でのコサックの自治の回復のために、外交的接触を重ねた。そして、再びトルコの保護を求めることになったのである。

他方、一七二一年に北方戦争を勝利のうちに終えたツァーリ政府は、ウクライナの自治の廃止に向けて、一連の措置を採った。かつて外務官署の一部門であった小ロシア官署を廃して、元老院直属の小ロシア省庁（コレギヤ）がウクライナに設置され、地方行政・裁判のあらゆるレヴェルに干与することになった。「裁判での不正やスタルシナの抑圧から小ロシア住民を守るため」、というのがその理由である。首領の所在地は、バトゥリンからグルホフへ、即ちロシアにより近い場所に変えられた。かつて自立的であったコサック軍も、ロシア人指揮下に編入された。更にウクライナの社会、文化生活も変容を迫られた。スタルシナは、ポーランド人、リトワニア人との婚姻を妨げられ、ロシア人の家族との結びつきを強めた。書物の印刷は、「東方教会との矛盾、大ロシアの印刷物との不一致がないように」大幅に規制された。新たに労働力の徴用、直接税の導入は、ウクライナの住民の経済生活に著しい打撃を与えたのである。

トルコのサロニカに滞在していたオルリクにも、ウクライナの住民全体の不満が伝えられていた。だが亡命中の彼にとっては、ツァーリに対するウクライナの人々の蜂起が不可避であろう、という確信を行動に移す術は、何もなかった。サロニカという町の商業的及びコスモポリタン的性格は、オルリクにとって、外交上、恵まれた場所であった。事実、フランス政府との交渉も何度か持たれた。だが、トルコの反ロシア政策の緩和、そしてついに和平は、オルリクの希望を最終的に打ち砕いた。東欧の主要な勢力のいずれも、もはやオルリクにいかなる政治的価値も認めることはなかった。最後まで、ウクライナの旧来の自由と特権の回復のための努力を続けながらも、一七四二年六月、オルリクはモルダヴィアのヤーシで世を去った。

以上が本書の概要である。〔附録〕として、オルリクのステファン・ヤヴォルスキー宛ての長文の書簡、クリミア・タタールやトルコとの同盟に関連する若干のドキュメントが、英訳されて収められている。著者には、同じくマゼッパの反乱に関する史料の英訳があることも付言しておこう。O. Subtelny. *On the Eve of Poltava. Letters of Ivan Mazepa to Adam Sieniawski* (New York, 1975)

(一橋大学助教授)